

版本文庫 I

伊勢物語

慶長十四年刊
嵯峨本第三種

解題
翻刻

片桐洋一

目次

解題篇

一、『伊勢物語』の成立……………3

二、書名と作者……………5

三、内容と方法……………7

四、伝本と底本……………10

五、嵯峨本と『伊勢物語』の挿絵……………20

六、後代への影響……………24

関係系図……………28

『伊勢物語』関係年表……………31

和歌初句索引……………36

翻刻篇

上卷（一段～四八段）……………42

下卷（四九段～一二五段）……………71

一、『伊勢物語』の成立

日本文学の特質は抒情と耽美にある。そして、その抒情と耽美の精神と方法は、『古今集』にはじまる平安朝和歌によって養われ磨かれたものである。おのれの心の動きを自然のたたずまいの中にとらえ、また自然のたたずまいの中におのれの姿を観じる古今集の方法は、実は専門歌人たちの漢学の素養による理智と合理を裏づけとするゆえに、抽象化され論理化された抒情と耽美に近づく。

抽象化され、論理化されるということは、個別性をうしない一般性をもつことにつながる。専門歌人以外の人々は、この抽象化され論理化されて一般性をもった和歌に、一種の説明を加えることによって、いわば演繹的に具象化し、特殊性をもたせるを知っていた。具象化し、特殊化することによって、生活に密着した、まったく別種の抒情と耽美の世界が作りあげられることを知っていた。というよりも、歌集をひもといて歌の一語一句を吟味しつつ鑑賞することは、専門歌人などごく限られた人たちにのみ可能なことであって、一般の人々は、いわゆる「歌語り」として、歌そのもの、あるいは歌の由来などを、耳で聞いて楽しむという享受の方法を、すでに万葉時代から身につけていたのである。

さて、「歌語り」は、本来、歌を中心とした、いわば歌を説明するものであったはずだが、それは次第に、歌をよくむ人間について語るものになっていった。「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり」（『竹取物語』）、「昔、式部大輔左大弁かけて清原の王ありけり」（『うつほ物語』俊蔭の巻）、「昔、藤原の君ときこゆる一世の源氏おはしましけり」（同・藤原の君の巻）、「今は昔、中納言なる人の、娘あまた持たまへるおはしき」（『落窪物語』）など、この当時の作り物語の書き出しが、すべて人間の紹介からはじまっていることを指摘するまでもなく、われわれの

知っているお伽話の数々を思い出しただけでも、物語というものが、本来的に人物を前面にもちだし、人物の事蹟を語るものであることがわかう。この歌は、いつ、どこで、だれによってよまれたものであるという「歌語り」本来の語り方が、次第に、だれが、いつ、どこでよんだというように、人物を中心として、人物の事蹟を語る物語の語り口にかわっていったであろうことは想像にかたくない。かくして「歌語り」は「歌物語」となったのであるが、さらに一步進めて、その人物を架空の人物とし、その架空の人物をしてよませた体の和歌を中心とした場面を創造するというようになる。事実談、つまり説話の世界から、虚構の世界が自立したわけであるが、『伊勢物語』の基本となる部分（詳しくは、拙著『伊勢物語の研究・研究篇』『校注古典叢書伊勢物語』を参照されたいと思うが、結論だけを記せば、二・四・五・九・四一・六九・八二・八三・八四・八七段などがその中心となる）は、六歌仙の一人である在原業平（八二五―八八〇）が「昔」の「男」の「ならの京ははなれ、この京は人のいへまださだまらざりける時」（二段）、つまり五〇年以上も前の平安遷都（七九四年）から遠からざる頃の昔物語（いわゆる時代小説）として、つまりは虚構の物語として、作りあげたものである。

このように『伊勢物語』の原初形態は、虚構の物語というたてまえて書かれているゆえに、そのすべてを業平の事蹟と断ずることは許されないが、その表現からみて、中心になっている和歌が業平の作であることだけは確かであろう。しかし、現在の『伊勢物語』を見ると、業平作以外の歌、すなわち『万葉集』の歌や『古今集』よみ人しらずの歌、さらには『古今集』以後、換言すれば業平が世を去ってから後の歌をも多く含んでいるのである。たとえば、一段の「わするなよほどは雲るになりぬとも」の歌は、『拾遺抄』（九九六―九九七年成立）と『拾遺集』（一〇〇五―一〇〇七年）に出ている橘忠幹の作であり、『伊勢物語』が『拾遺抄』や『拾遺集』からからとったまでは考えなくても、忠幹が活躍した天暦の頃（九五〇）から後になっての付加であると見なければならぬ。八八〇年に世を去った業平の作った段とこの段との間には、実に百年近くの年月がたっている。つまり、現在の『伊勢物語』は、一人の作者によって一時期に作られたものでないことが、あらためて確認せられるの

である。

業平作の部分を第一次『伊勢』と称し、一段のようにかなり後になって加えられた部分を第三次『伊勢』と称するならば、その中間の、第二次『伊勢』の姿を伝える資料に、尊経閣文庫所蔵の『在中将集』と宮内庁書陵部所蔵の『異本業平集（雅平本業平集）』がある。これらは、他の業平集諸本と同じく、『古今集』『後撰集』『伊勢物語』から業平関係の和歌を選び出したものであるが、この両集の撰集材料となった『伊勢物語』は、現在のそれと違って五十章段にも満たなかったと思われるからである（参考のために記せば、前述の第一次『伊勢』に一・一〇・一六・三九・四〇・四二・四三・四四・四五・四六・四七・四八・五一・五二・六七・六八・七六・七七・七八・七九・八〇・八一・八五・八六・八八・九三・九四・九九・一〇〇・一〇一・一〇二・一〇三・一〇七・一二三・一二五の諸段が加わったもの。くわしくは前掲拙著参照）。『在中将集』と『雅平本業平集』の成立年代は『後撰集』成立後まもない頃と思われるから、われわれは在原業平（八二五―八八〇年）時代の第一次『伊勢』、『後撰集』（九五一年）頃の第二次『伊勢』、そして、それ以後、おそらくは『古今和歌六帖』成立（九七八年頃）までに付加されて、今の形に近くなった第三次『伊勢』：というように、その成立・成長の過程をとらえ得るのである。

二、書名と作者

『伊勢物語』は、このように、在原業平の手になったごく少量の物語を基盤として始発したゆえに、在原氏の五男である業平が書いた物語という意味で、『在五が物語』（『源氏物語』総角の巻）とよばれたのである。さて一方、『伊勢物語』（『源氏物語』絵合の巻）と呼ばれたのは何故かとなると、実は的確な答えができないのである。昔から「伊勢人はひがごとす」という諺によって「ひがごと物語」の謂だとする説、風俗歌に「伊勢人はあやしきものをや」とあるから「あやしき物語」の意だとする説、「伊勢や月向や」という諺から、あれこれ入りまじ

つた構成の謂だとする説、あるいは「伊」は女、「勢」は男の意で、『伊勢物語』は男女物語だとする説、同じく「妹背物語」の転で、男女物語の意だとする説など実にさまざま、だが、そのいずれもが妄説と称するにふさわしく信ずるに値しない。ただ、これら昔からの説のうちで、古今集時代の女流歌人伊勢が編纂したゆえに『伊勢物語』と称するという説、伊勢斎宮密通事件を描いた六九段が、全編の中で特に印象深かったからかく呼んだあるいはこの段を巻頭におく伝本があったゆえにかく称したとする説に関しては、妄説と片づけられないものがある。しかし伊勢物語作者説については、文章表現から見て『伊勢物語』の作者はやはり男性であろうと思われるのに加えて、前述のごとく伊勢が活躍した頃の『伊勢物語』は、業平自作の域を離れぬものであったがゆえに従いかねるということになれば、結局、伊勢斎宮密通事件を描いた六九段と関連させる説だけが残るのであるが、そのうち、この六九段を冒頭におく本があった、あるいは、それがこの物語の原型であったがゆえに『伊勢物語』と呼ばれるようになったとする説には従えない。平安末期にこの段を冒頭においた小式部内侍本なるものが存在したことは確かながら、種々の角度から検討すると、その本は、むしろ『伊勢物語』の題号の因を明快に説明せんがために改竄した本だと考えられるからである。されば、結局は、この段が全編の中で特に印象深かったからかく呼んだという説に落ちつかざるを得ないことになる。原初形態の『伊勢物語』は前述のように、二条の後物語・東下り物語・伊勢斎宮物語・惟喬親王物語から成り、いずれもが独立した歌物語であったことを考えれば、その中で特に印象深かったこの段の物語の名をもって全体が呼称されたと考えることは容易であるし、またこの密通によって生まれた業平の子が、高階茂範の養子となり高階師尚となったことが、事実として（本当は事実であるかどうかかわからぬが）『江家次第』や『尊卑分脈』におさめられている「大江氏系図」に記されていることなどを思い浮かべれば、この段を重視するのは当然だと思われるからである。

題号の由来も判然とせぬほどに、はつきりしないことの多い『伊勢物語』であるが、作者についてもわからぬことが多いのである。第一次『伊勢』の作者が業平であろうということについては既に述べ、また近く別稿にお

いて、あらためて論じてみたいと思うが、第二次、第三次の作者についてはわからない。もともと、第二次については、第二次『伊勢』の中に「氏の中に親王みぎみうまれ給へりけり」（七九段）などと、在原氏を意識させる記述が多いことを思えば、在原氏の一族がかかわっているであろうということだけは言えるが、第三次成立の部分となるとまったくわからないのである。

三、内容と方法

『伊勢物語』は、一見種々の要素が混然として寄り集まっているかのように見えるが、前述のような成長の過程を考えると、必ずしもそうでないことがわかる。第一次『伊勢』で描かれている主人公は、一途な恋、ひたむきな愛に生きる、まことに純粹な男であった。恋しようとして恋したわけではなく、まったく「本意にはあらでこころざし」（四段）の深くなってしまうた女むすめを求めて一夜泣き明かす男であった。しかし、相手の女性はこの上なく高貴な人となって、もはや近づけない存在である。男は「身をえうなきものに思ひなして」（九段）東国へ流浪するのである。一方、六九段の伊勢齋宮密通事件も、これとまったく同じ描き方になっている。主人公が熱烈に思いを寄せながら、結局、その愛は挫折するという書き方である。第一次『伊勢物語』は純粹な愛情の物語であり、またその純粹さのゆえに挫折する悲しい物語なのである。

この純粹な愛情の物語という特質は、恋愛だけに限られたものではなかった。今は比叡の山の麓に閑居する失意の人惟喬親王のもとに年賀におもむき。昔、ともに風流に遊んだ生活を思い出して涙する主人公、これも一つの愛の挫折を描いたものである。恋愛であると否とを問わず、われわれは主人公のすばらしい愛と情に、かの室町時代の堯孝法印ではないが（『惟清抄』八三段の注）、涙のにじむものを覚えるのである。

それに対立するのは第三次『伊勢』の部分である。ここでは第一次『伊勢』のように「ならの京ははなれ、この京は人の家まださだまらざりける」頃の純粹一途な男を主人公としているのではなくて、「色好みの英雄在業平」に変貌してしまっている。文章の中に「殿上にさぶらひける在原なりけるをとこ」(六五段)、「在五中将」(六三段)と明記され、はじめから、女性が讃仰するすばらしい男という書き方である。「世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける」(六三段)という人物設定であるから、「百年もととせに一年ひととせたらぬつくも髪」の老女のもとへもおもむき、陸奥の「歌さへぞひなびた」女の所へも「さすがにあはれ」と思つて「行きて寝る」(一四段)という書き方である。さらにまた、自分が「年ごろおとづれざりける」ゆえに去つて行つた女と再会して、「いにしへのにはひはいづら桜花こけるからにもなりにけるかな」とよみ、さらに追いかけて「これやこの我にあふみをのがれつつ年月ふれどまさりがほなき」(六二段)とよむというのである。「さすがにあはれ」と思つて「行きて寝る」ことは寝ても、それは恩寵をかけ給うの類であり、さればこそ、「夜深く出で」たのであり、別れにあたつても、「栗原のあれはの松の人ならば」と通り一遍か、愚弄の詞としか思えぬような歌をよむのである。また、自分の通うこと少ないゆえに離れて行つた女に「こけるから」「年月ふれどまさりがほなき」とはあまりにも残酷な言葉ではないか。これは主人公をすばらしい男性とする扱いが、物語の前提になつてゐることを示している。つまり固有名詞としての「業平」が、「色好みの英雄業平」という普通名詞に変わつてゆく姿を、この第三次『伊勢』の増益の中に見るのである。

第一次『伊勢』は、業平自身の作と思われるにもかかわらず、時代を一時代前に設定して、業平を主人公としない立場で終始しているのに対し、第三次『伊勢』では、主人公が實在の業平ではなく、色好み業平という伝説的人物になつてゐるということであるが、その間に位置する第二次『伊勢』は、まさしくその中間的存在である。ここでは實在の業平の一時代前に舞台を設定する第一次『伊勢』とは違つて、實在の業平の時代にまさしく設定されてゐる。主人公自身は「右の馬頭なりける翁」(七七段)「右の馬頭なりける人」(七八段)「あるじのはらから

なる」(一〇二段)など、いかにも業平を思わせる書き方をしながらも業平とは記さぬ一方、同じ舞台に登場する人々がいずれも実在人物、たとえば紀有常(二六段)西院の帝(三九段)源至(三九段)賀陽親王(四三段)田村の帝(七七段)藤原常行(七七・七八段)貞数親王(七九段)源融(八一一段)在原行平(一〇一段)藤原良近(一〇一段)などの実在人物であることによつて、その業平のリアリティを拡充させようとしているのである。

ところで、先に主人公を「右の馬頭なりける翁」(七七段)と呼んでいるといったが、この第二次『伊勢』には「翁」と呼ばれる呼称が特に多いのである(四〇段・七六段・七七段・七九段・八〇段)。しかもその多くは権門の命を受けて歌をよむ場合の呼称である。能の「翁」によつてもわかるように「翁」の体をとつてみずからを卑しめ、相手方の栄華と長寿をことほぐのが翁の役割である。八一段において左大臣源融の河原院の「おもしろきをほむる歌」をよむ「かたる翁(乞食翁)」は、まさしくその極端な例である。また「翁」という語を使つていなくても、一段において「もとより歌のことは知ら」ない主人公が「咲く花の下にかくる人をおほみありしにまさる藤の蔭かも」と太政大臣良房とその一族の藤原良近の栄華を寿ぐのが、この第二次『伊勢物語』として付加せられた章段であるのも偶然ではあるまい。第二次『伊勢物語』には、このように、主人公が「翁」の体をとつて(あるいはとらなくても)わが身を卑しめた形で、権門貴族を寿ぐ形の章段が多いのである。

いっぽう、右のようなことほぎの場以外にも「翁」は出てくる。四〇段がそれである。昔、若い男が恋死するほどに女を愛したという物語の後で、「昔の若人は、さるすける物思ひをなむしける。今の翁、まさにしなむや」として語られているのである。

「今の翁」が、自分の若い時と思ひくらべて「今の若人」はだらしなしいというのは現在でもよくある老人通有の言い草であるが、右の場合はそれと異なつて、「今の翁」のだらしなさを批難しているのである。「今の翁」に恋死などできようかと言っているのである。「今」であろうと「昔」であろうと、老人は本来的に熱烈な恋とは縁遠いもので、そのような情熱がなくても特に断わる必要もない。それでは何故わざわざ断わつたりしたのか。

その答えは、ただ一つ、「今の翁」がすなわち「昔の若人」と同一人というたてまえだと解することである。別の言い方をすれば、「今の翁」がみずからの「若人」たりし時の振舞を回想しつつ老を嘆くという形でこの第二次『伊勢』が作られているからこそ、このような表現がなされ得たのである。第二次『伊勢』に圧倒的に多い卑下謙退の辞の存在もこのことを裏づけるものと言えよう。

これを要するに、業平自作の第一次『伊勢』をうけてこれを増補した第二次『伊勢』の作者は、既に存在していた第一次『伊勢』が業平より一時代前に舞台をおいていることに気づかず、業平自伝と考えて、みずからも同時代の人物を持ち出して業平の時代を舞台にしていることを示して、主人公が業平であることを暗示しつつも、第一次『伊勢』の書き方にならって、韜晦して、「業平なり」とは言い切れなかったのである。第二次『伊勢』は、第一次『伊勢』における主人公の熱情を今は老いさらばえた業平が回想するという形をとっているからである。

以上見て来たように、『伊勢物語』は、おおむね百年近くもかかって現在のようになつた。一人の作者の創造性に貫ぬかれていたとは言えぬが、多くの人々の好尚が加わり、民族の心を汲み伝える素晴らしい作品になった。作者の視点と方法を変えることによって、作品に多様性とゆとりが出来た。また、その成長の過程における性格の変化は物語文学史の変転をそのままに反映しており、一つの作品の中に物語文学史を見ることが出来るような巨大な（形態はあくまで小さいが）ものになったと思うのである。

四、伝本と底本

『伊勢物語』は、平安時代以来、和歌を学ぶ人の必読の書として扱われて来たし、また量的にも手ごろであったので、数残く書写され、また版行されて来た。写本・版本がこれほど多い文学作品は、おそらく他に存在しな

いと言いつてよいと思う。

前にもふれたように、平安時代には、現存諸本のごとく「昔、男、初冠^{はつかん}して……」ではじまる初冠^{はつかん}本系統のほかに、男が伊勢の狩の使に行つて齋宮と密通するという段（普通本六九段）を冒頭におく狩の使本の系統が存し、和泉式部の娘小式部内侍が書写した本がその系統であるという伝えもあつたが、現在伝わっている伝本はすべて初冠^{はつかん}本である。今、これを系統に分けて示すと、

(A) 普通本系統（百二十五段前後の章段を持つ）

(1) 定家本（藤原定家が書写した本の系統）

(2) 別本（右以外のもの）

(3) 真名本（真名で書かれたもの、別本に入れてもよい）

(B) 広本系統

(1) 大島家旧蔵本

(2) 阿波国文庫旧蔵本（他に神宮文庫本や谷森本も同じ）

(3) 泉州本

(C) 略本系統（普通本より章段の少ないもの）

○塗籠本（伝民部卿局筆本の系統）

のようになる。しかし、実をいうと、現存本の九九%以上が定家本系統なのである。けだし、中世における異常なまでの定家崇拜のせいというべきであろう。

藤原定家は、われわれが知っているだけでも、建仁二年六月、承久三年六月、貞応二年十月、嘉祿三年八月、寛喜三年八月、天福二年正月の六回、それに書写年号をしるさぬ天理爲家本・九大爲家本・千葉本・文暦奥書本（これらについては天理図書館善本叢書『伊勢物語諸本集一』の解題を参照されたい）や武田本・流布本などを

加えれば、まことに数多くの『伊勢物語』を書写校訂しているのであるが、現存する本の大半は天福本・武田本・流布本の三種であつて、他は伝存せぬか、また伝存しても極度に稀というのが実状である。

さて本書の底本は、鉄心斎文庫御所蔵のいわゆる嵯峨本第三種（慶長十四年刊）であるが、その奥書に、伊勢物語新刊世酷多矣。然京極黄門一本

之奥書云此物語之根源古人之説々不同云云。

而今以天福年所被与孫女本正之。猶恐有

字畫之差互聊加訂校又圖卷中之趣而

分爲上下盖爲令好事童蒙悦目也。於

戲予老懶衰情不堪辨焉。豈無紕繆

博洽君子改匡焉幸甚。

慶長己酉仲春上澣日

とあるごとく、本文は「此物語之根源古人之説々不同」という識語ではじまるいわゆる流布本（根源奥書本）を天福本によつて校訂したものである。事実、具体的にその本を検討してみると、

段	天 福 本	流 布 本 (闕疑抄本文)
5	○いけどもえあはで	いけどえあはで
9	○やつはしとはいひける	やつはしといひける
14	○くりはらのあれはの松	くりはらのあねはの松

86 81 81 78 74 69 69 65 65 64 62 62 58 54 52 46 27 23 16

こと人にもにず

○こひつゝぞふる

○こざりけるおとこ

たいめんせで

かさなりちまきをこせたり

夢ちをたどる

あつまりきゐてありければこのおとこ

○われをばしらずや

○まさりがほなき

○昔おとこ

○いとかなしきこと

このおとこ人のくにより

女もはたいとあはじとも

女のねやちかく

○かさなる山にあらねども

○さるにかの大将

○だいじきのしたに

となむよみけるは

○うたをよみてやれりけり

○ことに人にもにず

こひつゝぞぬる

かのこざりけるおとこ

○えたいめんせで

かさなりちまきをこせたり

○夢ちをたのむ

○あつまりきゐてありければおとこ

われをばしるや

まさりがほなみ

昔おとこ女

いとかなしきこと

○このおとこは人のくにより

○女もはたあはじとも

○女のねやもちかく

かさなる山はへだてねど

さるにこの大将

いたじきのしたに

○となむよみける

うたをよみてやれりける

87	○ゑうのすけども	ゑふのすけども
87	いしのおもて	○いしのおもてに
87	あまのいさり火	○あまのいさりする火
87	○わがすむかたの	わがすむかたに
90	○かくもにほふとも	かくもにほふらめ
96	○あきまつころをひに	あきたつころをひに
96	○さりければ女のせうと	さりければこの女のせうと
101	○かくる、人をほみ	かくる、人をおほみ
107	○かのあるじなる人	このあるじなる人
112	○いひちぎりける女	いひちぎれる女
115	○おきのゐで宮こじま	おきのゐみやこじま
123	○かゝるうたをよみけり	かゝるうたをよみける

天福本と流布本(「闕疑抄」所引の本文)を比較し、底本が一致するものに○を付したのであるが、一目見てわかるように、底本は両者のよい方をとっているのである。つまり底本は、ある一つの系統の本を厳密に復原しようとする態度ではなく、流布本をもとにしつつ天福本を対照、そのよい方をとったというわけである。

ところで、この底本は、川瀬一馬氏によって嵯峨本第三種と呼称されている本である。いったいに、嵯峨本とは、本阿弥光悦・角倉素庵の協力になる木活字本の一類を、その居住の地にことよせていうのであるが、広義には光悦が直接活字を書いた「光悦本」や、光悦・素庵が直接関係したことは明らかながら版下は光悦の弟子に書かせた「狭義の嵯峨本」の類のみならず、これらを規範にして製作されたものを含めていうとすれば(川瀬一馬氏『古



みちのくの人ふもちけをよめふ
 見よとてあふりまきなりけり
 けいふううけいんへあきなり人いあ
 いちうやきやひをなんん志ん
 廿うおとてありなりふの京いえあれ
 こ乃京人乃いふまきいふはうさるあ
 時小面の京なりぬあなりうけ女さ人
 るんまきよりあなりふのふのちうわは心
 かひあなりふのふのちうわは心

図版1 嵯峨本『伊勢物語』第1種(イ)版

活字版之研究)、この底本になった嵯峨本『伊勢物語』も、まさしく「広義の嵯峨本」の例に入るのである。

嵯峨本の『伊勢物語』が最初に刊行されたのは慶長十三年五月のことであった。川瀬氏はそれを第一種本と第二種本に分け、第一種本をさらに(イ)版・(ロ)版に、第二種本を(イ)(ロ)の三版に分けておられるが、私の見るところ、第二種本にはさらに三版ほどあり、さらに後述する中院通勝・也足叟の署名と花押がない本もあって複雑多岐にわたる。いずれにしても慶長十三年の一年間に、よくもこれほどの別版が出たものだと感心させられるのである。

さてその中で、光悦書風の真面目をもつともよく表わしているのは、第一種本(イ)版である(天理図書館善本叢書に影印が予定されている)。藤色・薄紅色等の色変り具引きの料紙を用い、表紙は藤色に卯の花の雲母模様。題箋は中央に「伊勢物語上(下)」とするのが原装のようである(以下は内閣文庫本による記述)。巻末に中院通勝の勘記を刷り、通勝自署の墨書き花押がある。今、その勘記を記すと、

門一本之奥書云此物語之根源古人之說々

不同云々。如今以天福年取被與孫女書正之

然而猶有訂校之遺欠也。更圖書卷中

之趣分以爲上下、是雖不足動好女人情

聊爲令悅稚童眼目而已。

慶長戊申夏上浣

也足叟（花押）

とある。ここにもあるごとく、流布本を天福本によって校訂したのは、おそらく道勝の所爲としてよいであらう。第一種本(ロ)版は(イ)版の活字がいたんだものを入れ替えて刷ったもののごとくであるが、挿絵は同版であり、巻末の識語と通勝の花押のあることも同じである。料紙の色や仕立ても同じ、表紙も同じであつたろうが、原装本は未見であるため確認出来ない。

第二種本もまた慶長十三年の刊である。川瀬氏はそれを(イ)(ロ)(ハ)の三つの版に分けられたが、鉄心齋文庫本はこのいずれにも属さず、筆者架蔵の本もまた異なるし、同じ版でも通勝の花押のない本もある。また先日たまたま某家で一覽した本も同じく第二種本ながら、活字の異なる部分を持つものであつた。かように見る時、さらに他にも異版が存するであろうことも十二分に想像出来る。ところで、第二種本は光悦風をいくばくかは伝えるものの、活字の様式は異なっている。部分的に活字の出入は異なるが、第一種本に比し細め、繊細なる印象をぬぐいがたい。挿絵の方は第一種本と同版と見てよいようであり、また五色の料紙を使用すること等も同じである。

このように、慶長十三年には、大きく分ければ二種、細かに分ければ最低八類の『伊勢』が上梓されているのであるが、早く和田維四郎氏が言われているごとく（『嵯峨本考』）「貴顕及び知友に贈与することを目的として出版したもの」と想像せられることから考えて、さらにはまたそのたぐい稀なる美術的工夫を併せ考えて、木活字